

聖書の宇宙観

申命記 33 章 27 節

エレミヤ 23 章 24 節

「とこしえにいます神はあなたのすみかであり下には永遠の腕がある」(申命記 33 章 27 節)

「主は言われる『人はひそかなところに身を隠して、わたしに見られないようにすることができようか』」

主は言われる、『わたしは天と地に満ちているではないか』。(エレミヤ 23 章 24 節)

序 言

今日の霊修会メッセージのテーマは「聖書の宇宙観」であります。このテーマを聞いて「ハハア、あれだな、わかったぞ」と思う人もいるでしょう。その人は多分、お手許に配っておいた「ヘブル人の宇宙像」を想い浮べていることでしょう。右図のような宇宙観は旧約聖書の注解書などにしばしば記載されているものです。この図からは創世記や箴言のみ言が連想されます。先ず、〔創世記 1 章 6 ~ 19 節〕で、神は大空の下の水と上の水とを分けられた。〔箴言 8 章 27 ~ 29 節〕で、神は天を造り、海のおもてに大空を張り海にその限界を立て、水が岸を超えられないようにし、地の基を定められた。〔創世記 1 章 14 ~ 19 節〕で太陽と月と星々を造られた。このほかに、地下の死者の行く世界があって「陰府(シェオル)」といました。

これらを総合して一つの図に表すと右図のようになるというのです。大空のところどころに天の窓があって、そこから上の水が降ってくるのが雨だと考えられたというのですが、本当でしょうか？とにかくこの宇宙像は幼稚であり、一元的であると言わねばなりません。

なぜなら、聖書の宇宙観は霊界と物質界から成り立っていて、言い換えれば四次元以上の霊界が、三次元の物質界の基礎になっているからです。つまり、霊界が先に出来て、その霊界のコピー、あるいは影のようにして、物質界が出来ているからです。そして、何よりも先に宇宙の大霊としての全知全能の創造主なる神様(エロヒーム)が永遠不滅の絶対神として存在しておられます。すべて存在するものは、この神様から出て来たのです。

1. 天地万物の創造（生成）主

「はじめに神は天と地とを創造された」(創世記1章1節)

この一句は極めて重要な意味を含んでいます。この解釈を間違えると、あたかもシャツの初めのボタンを掛けちがえたかのようにすべてがくいちがって来ます。多くの神学者が「創造する」(バーラー)というのは「絶対無比の神が全くご自身とは連続性を持たない被造物を無から造り出す」という意味なのだとして解釈して来ました。これが初めのボタンの掛け違いなのです。そこで、〔ローマ4章17節〕「無から有を呼び出される神」は誤訳であって、「無いものを『有るもの(オンタ)』と呼んだ神」が正しい訳であります。

実は、神様はすべてのあるものの根源であり、「有って有るお方」(エイエー・アシェル・エイエー)なのです。〔出エジプト記3章14、15節〕を見て下さい。「わたしは有る」(エイエー)と名乗り出た神様からすべての有るものは出て来て存在しているのです。それも神様から離れて存在しているのではなく、神にいだかれ、つまれ、愛されて、在らしめられているのです。だから、モーセは何も恐れる必要はないと言われました。そこで人間の側からこの神様を呼ぶときは、「彼は有る」(ヤーウェ)と呼びなさいと神様は言われました。ここで口語訳で「主」とは「ヤーウェ」のことです。

皆さん、私たちも「有って有る」神様の永遠の御腕に支えられて存在しているのです(申命記33章27節)。神様の愛のふところにいだかれているから、神様が永遠の住処だというのであります。

だから、広い意味では、私たち人間は神の子であり、或種の神との連続性をもつ存在なのです。つまり神性をもっているわけです。従って神から生まれた神の子なのです。しかし、神の独り子イエス様との間には、或種の違いがあります。又、神から生成されたすべての被造物に神性が付与されています。これらの被造物の間にも少しずつ違いがあります。その成り立ちについて考えて見たいと思います。

2. 生成（創造）の過程

神様があるものを造り出す過程は、先ずご自身の心の思いの中に造るものをイメージ（想像）アップして、それを「有る！」と宣言するのです。この心の中にイメージアップする場合、人間で言えば子宮の中に子を孕むようなものです。10ヶ月お腹の中で子を育てて産み出すように、神様は時満ちて「有る！」と宣言すると無かったものが出現するのです。

例えば「光」です。〔創世記1章2～5節〕を見てください。

ここでは、初めに「やみ」がありました。

「地は形なく空しく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」（2節）

「地」は形なく空しく、混沌として未だ出現していなかった。しかし、大いなる水があった。「おもて」（パニム）という語は「表面」という意味もありますが、本来は「所在」を表す語です。又、「おおっていた」（ラハフ）は、「静かにおおう」意ではなく、「激しく動く」意味です。つまり、神の霊のバイブレーションです。そこで2節を直訳すると、こうなります。「淵のあるところには、やみがあった。そして水のあるところには、神の霊が激しく動いていた。」水といってもそれは、いわば水蒸気が雲・霧のような水の微粒子であって、形あるものが生まれてくる前の素粒子のような状態を例えたものです。神の霊が激しく振動し、混沌として形を成していなかった霊のやみの中から、神の愛のエネルギーが秩序ある天界（霊界）を生み出し、秩序ある物質界を生み出して行くのです。

これは今日の量子物理学の説明とよく似ています。量子論の物理学者デビッド・ボームによれば、この世は「明在系」（光）、あの世は「暗在系」（やみ）なのです。そして、この世（明在系）は、あの世（暗在系）の中から、ある意味と目的に従って、物質とか身体とかが出てくる。それを存在させるのが「コトバ」なのです。「何かの拍子におおぜいの群衆が軍隊のように一糸乱れぬ行動を取ることがあるように、多くの素粒子が協調してひとつの行動を取

ると、そこに「物質」が出現します。その一糸乱れぬ行動を指揮しているのが「意味」すなわち「ことば」なのだということです。」(天外伺朗「ここまで来たあの世の科学」P 75 - 77)

この暗在系と明在系との対比は、「夕あり、朝ありき」という聖書の概念と一致します。又、暗在系とは「神」と言いかえることも出来るようです。

そこで、「神は、『光あれ』と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名付け、やみを夜と名付けられた。夕となり、また朝となった。第1日である」(創世記1章3～5節)

この「光あれ」は、「光あり」でもよいのです。「ある！」という「コトバ」に応じて、「有りて有る」神様から先ず光が生まれ出ました。

ある人々は「これは宇宙創成のビッグバンの光だ」と解釈しますが、わたしはこれを探りません。なぜならば未だ物質界の生成される前の光であり、根源的の霊の光と解すべきだと考えるからです。これは神の独り子「コトバ」から発せられた命の光であります。ヨハネ福音書を見て下さい。

「初めにコトバがあった。コトバは神と共に在った。コトバは神であった。このコトバは初めに神と共にあった。すべてのものはこれによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。このコトバに命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(ヨハネ福音書1章1～5節)

すなわち、「光あり！」の父の意思を子なる神がうけてコトバを発した時、言霊(コトダマ)である聖霊が働いて、光の世界が出現したのです。それが天界の生成です。

具体的に言えば、御子に似た靈魂である人の霊や天使の霊が光の存在として無数に生まれたのです。そして愛と義と平和に満ちた三一の神を中心とする天界を形づくったのです。それが私たちの靈魂の故郷です。私たちの靈魂はより優れた神の子に成長させられる目的をもって、

神の生み出された三次元の物質界に降ろされて、肉体をもった人間となります。

御子から発した光の波動が微細なものから、粗雑なものへと移行してゆく段階において、四次元以上の微細な光の世界が、もろもろの天界を形成し、三次元の粗雑な波動の光が、この世即ち物質世界を形成したのだと考えられます。しかし、いずれも光であることに変わりはありません。

ですから、初めの人アダムが土のちりで体を造られてその中に人の靈魂を入れられたので生きたものとなりました。靈魂が肉体から離れ去れば、体は死んで土に帰りますが、人の靈魂はこれを授けた神様のもとに帰って行くのです（伝道の書 12 章 7 節）

しかし、人の靈魂が天界の波動と同調するように高められ、きよめられていないならば、陰府から地獄へと降ることになります。地獄とは神に背いて、神との間の調和を失ったサタン・悪靈の世界であって、これに同調する人の靈魂はやみの世界に住むことになります。しかし、全く絶望というのではなく、少しでも地上にいた間にイエス・キリストの福音にふれ、神の愛を求める気持ちのある人には、救いのチャンスがおとずれることもあるそうです。陰府は中間の靈界ですから救いのチャンスはもっとあります。イエス様をはじめ、天使・聖徒たちが救出活動を展開している世界です。

しかし、最も大切なことは、この世にある間に出来るだけ早くイエス様の救いに与ることです。

3 . 万物は神に帰る

人は皆、神に帰ります。イエス・キリストの系図が二つあります。

(1) アブラハム ダビデ イエス (マタイ 1 章 1 ~ 16 節)

(2) (ルカ 3 章 23 ~ 38 節)

イエス	ヨセフ	シメオン	ダビデ	ユダ	ヤコブ	イサク
アブラハム	テラ	セム	ノア	ラメク	メトセラ	
エノス	セツ	アダム	神			

人だけではありません。動物もアダムの伴侶となるかどうかと、神様が見られたこともあり、動物にも¹霊魂が宿って生きたものとなり、霊魂が去れば死ぬ。ということは、動物の霊魂も天界に帰るのです。植物も心をもち²霊をもち人の心と感応します。石³だって、岩だって、水だって、空気だって、みなそうです。みな神性があり、意志があります。だからアニミズムや汎神論が出て来たのです。しかしアニミズムや汎神論には霊界の秩序が明確ではなく、混乱があります。

それに対して聖書では、天地創造の神様を主とした秩序ある世界が展開されて行くのです。そして全てのものは、これに神性と存在とを与えた唯一の神様に帰一して行くのです。

1 動物

(詩篇104:29~30 創世記2:18~20 伝道3:18~21)

2 植物

(イザヤ55:12~13) 植物には心があり、精霊が宿っています。

3 無生物の水、石、岩、火、空気などにも心があり、精霊が宿っています。

この点日本神話が一つの参考になるでしょう。

私は、「日本のためのとりなしニュースレター」第2002年7月号で泰氏が日本神話を形成したというレポートを載せました。

~この本質的な三一神から様々の神々が生まれ出ます。例えば伊弉那岐神(いななぎのかみ)と伊弉那美神(いざなみのかみ)という夫婦神です。この夫婦が性交して日本列島の島々を次々と産んで行きます。国土を生み終えた後、様々の神々を生むことになります。伊弉那岐神が高天が原を流れる清流で左の目を洗った時に生まれたのが天照大御神(あまてらすおおみかみ)であり、右の目を洗った時に生まれ出たのが、月読神(つくよみのかみ)であり、鼻を洗った時に生まれたのが須佐之男命(すさのおのみこと)でした。伊弉那岐神は天照大御神に太陽のごとく昼を治め、月読神には月のごとく夜を治め、須佐之男命に

は海原を治めるように命じました。ただし、彼らは太陽神・月神・海神だったわけではありません。しかし、その後生まれ出る神々は、石の神・土の神・水の神・海の神・川の神・山の神・野の神・霧の神・火の神等、いわゆる森羅万象に内在してそれらを司る神々でした。これらは現代の宗教学では、アニミズム・多神教・汎神教等に分類されて、唯一神教と対立するものとして扱われていますが、日本神話においてはそうではありません。これらの神は絶対神ではなくて、天使・精霊・妖精といったような秩序に属するものです。日本神話においては、すべての被造物が三一の神から成り出でて、神の栄光を様々な分野において現して生きている神的(ディヴァイン)な存在であって、単なる物質ではないのです。動物も神の息によって生かされている神的な存在だという聖書の御言葉(詩篇104:29~30)の通りです。~

~八百万の神々がいると言われますが、これらは悉く天照大御神に帰一し、同時に天之御中主神に帰一するのです。ですから多神教に見えても実は絶対唯一神教なのです。

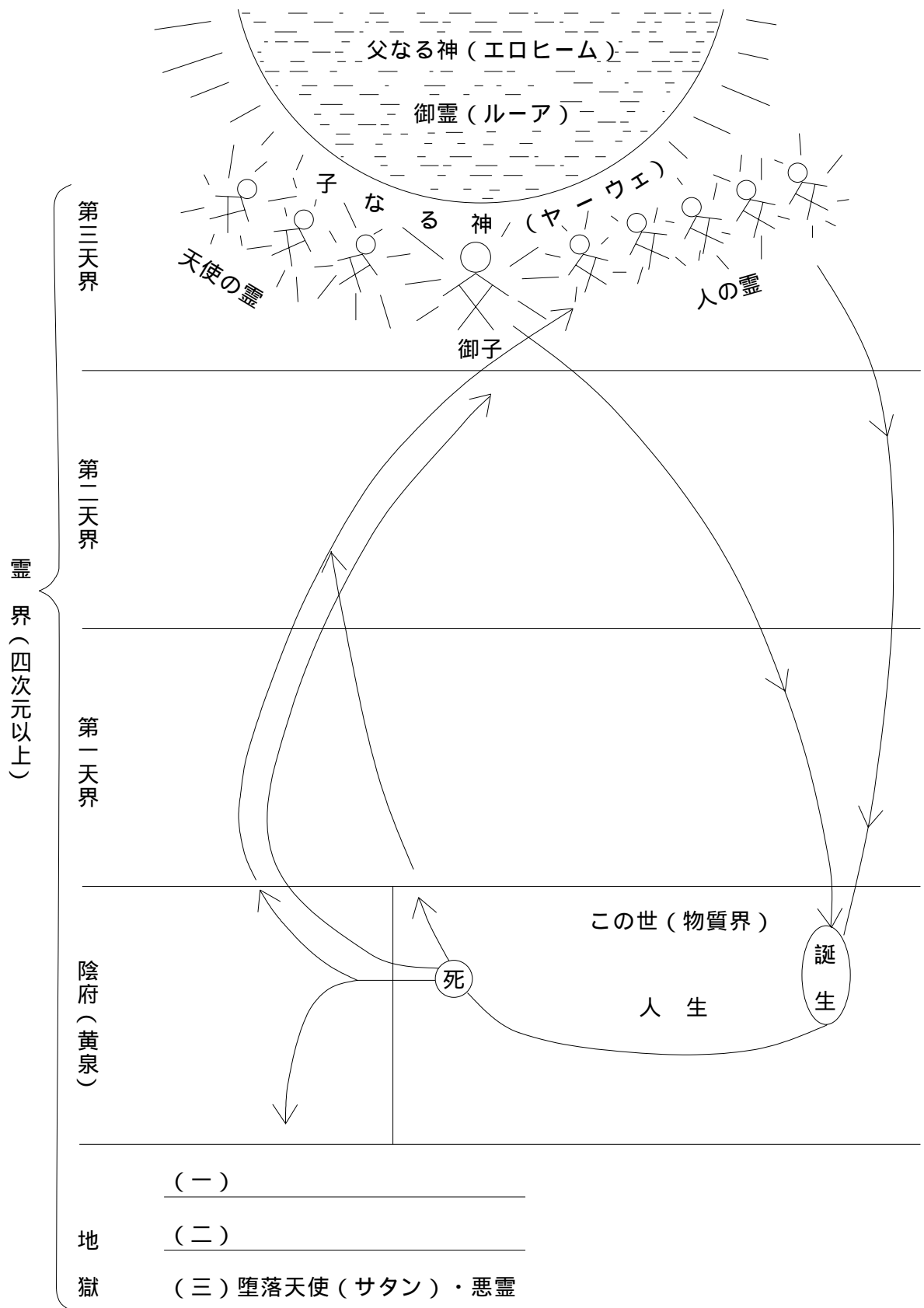
聖書的に言えば、一切のものは御父と御子から聖霊によって成り出でて、この世に存在し活動し、再び御子イエスにあって一つになり、御父に帰一するというわけです。(エペソ1:10)

「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように。アアメン」(ローマ11:36)

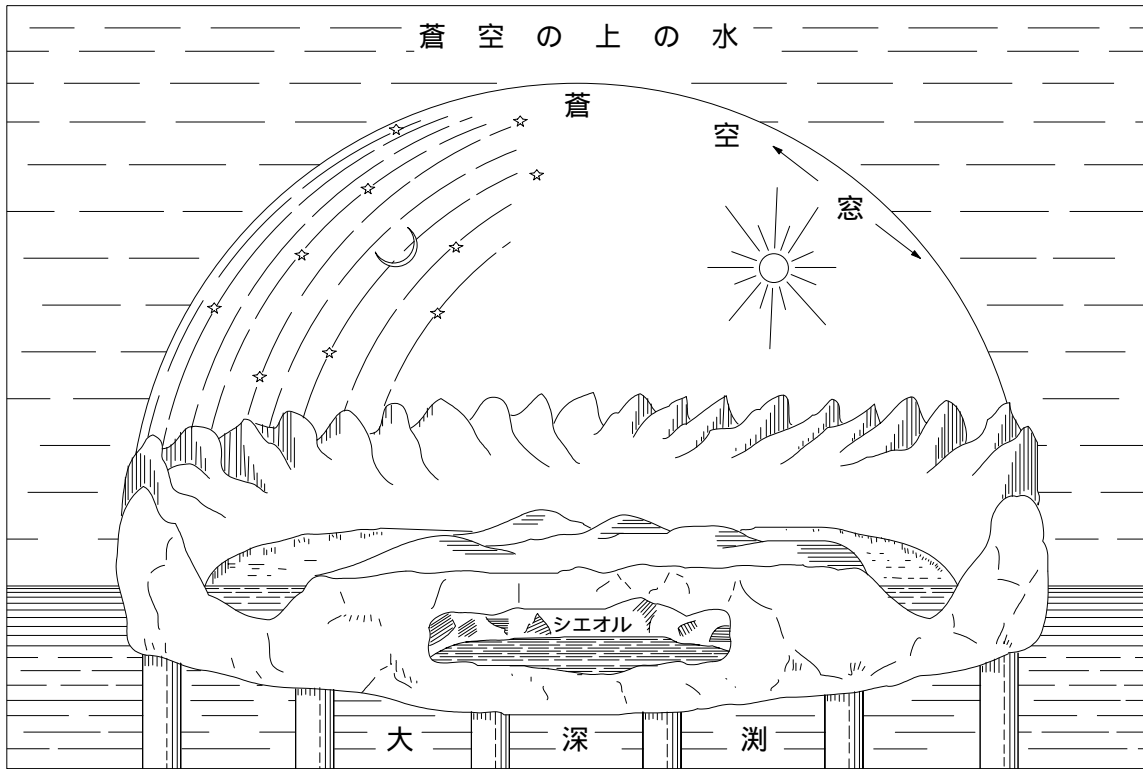
結 語

以上述べたように、全ての被造物は神から出て、それぞれに光の存在であり、神性を宿す霊的存在なのであります。物質界では霊は物質の中に宿りますが、物質そのものも粗い波動の光の存在なのです。こうしてすべてのものは、神から出て、神によって成り立ち、神に帰ってゆく。それは、イエス・キリストによって統括されてゆくのです。万物の中に聖霊が充満して、これを秩序づけ、破れを修復し、病をいやし、調和をつくり

あげています。こうした秩序の中に生きる私たちは、生きとし生けるもの、在りとし在るものを愛し、大切にして神の栄光がかぎりなく現れてゆくように仕えて行きたいと思
います。 アーメン



ヘブル人の宇宙像



(創 : 6 - 8 , 7 : 11 , 8 : 2)